

えるぶらん

大村伸一

§ ニュース

おはようございます。朝のニュースの時間です。

昨夜、エルブラン博士は全宇宙の統一理論を発見しました。
これでこの宇宙は秩序に満ちた矛盾のない平和で安心な世界になるでしょう。
今夜、博士の講演会が予定されています。

つぎは伝染病のニュースです。

失語病の感染者数が今朝、203名になりました。
この病気は話をすることによって伝染します。誰とも話さず、手紙や電話もしないようしてください。
視線もあわせないようにすることが肝心です。

さて、今はいりましたニュースによりますと、これから月は永遠に満月のまま。
欠けたり満ちたりしないことに決定した模様です。
長い間おつかれさまでした。

§ 長い目

彼の目はとても長く顔をはみだして左右にそれぞれ5cmくらいずつ出っ張っている。
友達には自慢げに視野が広いことはいいことだと言っているがそれはきっと自分を納得させようとしているだけなのに違う。
というのも彼が毎日散歩のコースに選んでいる路地裏では道を挟んだ壁の幅が10cmしかなく散歩から帰った彼の目はいつも真っ赤に充血しているからだ。
そんなとき彼はまた悲しいことがあっただけだと言いつつ訳をするのだけれど目の端を壁にこすりつけた跡ははっきり残っていて小石や木くずが付着したままになっている。
うしろからだと言いつつ彼の目が耳よりも飛び出しているのが見えるからおそらく彼は前を向いたまま後が見えるのではないだろうか。そう彼に質問すると彼はその質問をずっと待っていたのだとでもいうようににったりと笑い勿論だともそうやって後ろを見ると当然のことだが左右が逆になってみえる。ということは鏡

に映った自分の後ろ姿は左右の正しい立像になるはずなのだが実際はそうはならず上下が逆に見える。

と答えにやにやしながら質問した者の顔をじっとみつめる。

§ つめ

彼が右手の手袋をはずしたところを見た者はいない。

それは勿論町中のうわさになっていていわく

彼は指が8本あるのだ

とか

彼の右手にはみごとな髑髏の刺青があり彼はそれをひどく恥じているのだ

とか

彼の右手は義手で手袋をはずすと彼の意志に関係なくなにか卑猥な仕種を始めてしまうのだ

とか

エトセトラエトセトラ

彼がごくごく親しい友人に語ったところでは彼の右手の親指の爪は異次元に通じておりのぞきこめば未だ誰も見たことのない遠い銀河の星雲を垣間見ることができる。

しかし手袋をはずすやいなやこちらの世界はその親指の爪の中に吸い込まれてしまいこの世界は跡形もなく消え去り当然わたしたちも死に絶えてしまうのだという。

勿論そんな話を本当にする者はおらず出来のよくない冗談を聞いた人たちはお愛想の微笑みを浮かべることもなくどう反応してよいのか分からない気まずい沈黙でその場をやりすごすということになる。

§ ねこ

彼はねこを飼っている。

といわれている。

いや言っているのは彼だけで他には誰もそんなことを言っていない。

第一彼の邸宅でねこをみかけることはなかった。

飼い始めてもう十年あまりになるのだけれど灰色の牝猫でアウルという名前。

血統はよくわからないが美しい毛並みでとてもかしこい。

子供の頃はそれはもうかわいくてどこへ行くのにも肩に乗せて一緒に行った。寝るときは顔のすぐそばでアウルの吐息をききながらでなければ熟睡することができなかった。

そして今やその美しさはたとえようのないものとなりじっとみつめているだけでなにかこう幸福な気持ちにつつまれていられるのだ。

そう彼は言う。

数年前にこれはゾハルという純白の猫と恋仲になり今やかわいいふたりのいや二匹の子供までいる。

ほらそこを三匹で一緒に歩いてるじゃないか。

そう言われて指差すほうを見てもただ枯れかけた不眠草の葉が風にゆらけているだけだ。

§ にわ

庭にはいつもにわか雨が降っている。

こう四六時中降っているのならわか雨ではなくていつも雨とかつねに雨とでもいうべきなのではないかという原料が若干違うのだと彼は答える。

雨の原料といえば水だけではないのですかと重ねて問い掛けると彼はそんなに単純ならいいのだけれどと少しさびしそうな表情を浮かべる。

§ 遠い耳

彼の耳は遠い。

手紙を出すと耳に届くまでに少なくとも一週間はかかる。

ハガキだとこれが二週間になる。

耳から送られてくる返信の消印はいつも水ににじんで読み取れない。

なめてみると塩辛いからおそらくどこか南の方の島に住んでいるのだろう。

§ 天空のかぶとむし

町の上空にはいつも一匹のかぶとむしが飛んでいる。

彼は月を観測しているときにその虫に気づいた。

それ以来その虫を観察しつづけているが一度もそのかぶとむしが休んでいるところを見たことがない。

もしもかぶとむしが生まれてから死ぬまで一度も休むことなく飛び続けるのだとすればかぶとむしにとって思考するということと飛ぶということとは同じことを意味しなくてはならない。

それは思想が文章や言葉として表現されなくては存在しないのと同じことだ。

だから彼がかぶとむしの哲学を学ぶため一日三時間を昆虫の観察に費やしている。そのせいもあるのだろうかこの頃彼は数センチ程度なら飛ぶことができるようになってきた。

§ 講義

つまり非常に大きなエネルギーというものは相互に強く結びついています。複数の巨大な質量つまりエネルギーを持つ存在のその中心はあたかもそれらの間にトンネルがあるかのようにそのエネルギーの中を通りぬけて行き来することができるわけです。

星というものはそのようなトンネルの出口です。

出口は星の中心にあり恒星であればやってきたものはプラズマの流れによって表面に押し出されるでしょうし惑星であれば火山活動によってマグマと共に空に運び出されることになります。

時々月から訪れる者達がとても奇妙な姿をしているのはそれほど遠くからやってきたからなのです。

§ 下水

町の南側の一带から下水が詰まっているという苦情が殺到した。

調査によると下水道に誰かが住み着いていてそれで水路が閉ざされてしまったらしい。

大勢で地下道を探査してようやくみつけれられたのは205人の薄汚れた少女だった。報告書には書かれなかったがこの205人の少女は全員まったく同じ顔年齢体格髪性格をしていて言葉はひとつも話せなかった。

耳にピアスの跡があったので少女がもともとは地上にいたのだということは想像できた。なにかあるいは誰かによって地下に閉じ込められていたのだろうと

報告書には書かれている。

§ 欠語症

この国の言葉にはなにか重大な単語が欠けているのだと彼は主張する。その言葉がなければ人生は無意味なものとなり真実が目の前であっかんべーをしていても気づかないというような最悪の事態にもなりかねない。それほど重要な言葉がないのだと言う。

他の国の言葉、彼は自分の友人全部の手の指の数をあわせたよりもたくさんの言葉を理解していたが、それらすべての言葉にはちゃんとその概念が存在しあやまりなく考察することができるのだがひとたびこの国の言葉を使い始めるやいなやその概念が存在したことすらおぼろげな記憶と化してしまう。いやおぼろどころかまったく想像することすらできなくなってしまう。

当然それがどの言葉なのかを示すことはできないがそれが存在することだけは確かなのだと彼は主張する。

そのあとでたふんとつけくわえるときの彼はすこし口惜しそうに見える。

§ 義眼

義眼であることを彼は少しも隠してはいない。だがそれと気づく人はほとんどいはいないのだ。それが右目なのか左目なのか親しい友人達ですらはっきりとは知らない。

たとえば

右目を隠してポケットの中のコインの数を当てるとか
左目を隠して握り締めたナイフの向きを当てるとかあるいは
両目を隠して部屋の中で裸になっている人物の名前を当てる
などといった実験をすると彼はどんな場合でもずばりと正解を言い当てる。

§ 葉脈

退屈なときは葉脈を辿る。

葉脈を辿れば心は静かに深みに沈んでいきやがてその底にある植物の時代にた

どり着く。

するとこれほど古い葉脈の言葉の意味をたやすく理解することができる。それは植物の日記であり歴史であり出納帳であるともいえる。それを読めば彼らの愛がきわめてなげやりな感情に基づいていることや彼らの唯一の楽しみが瑪瑙の模様を辿ることであったことなどがわかる。そして彼らほど忍耐強く感情を表にださずかけひきに巧みな交渉の達人がほかに存在しないことも理解できる。

§ 壁

町の境界にある壁はてっぺんがおぼろに霞んでいてどこまであるのか判然としない。

彼は休日になるとその壁を登る。

壁にはてがかりとなるものはなにもなく登ろうとしてもすぐにすべり落ちてしまう。

彼の理論によるとつまりこの壁は登るという行為と墜落するという行為（これを行為と呼べるものかどうかかわからないが）が同時に発生するから登れないのである。ゆえに登る行為と墜落する行為を異なる個体あるいは異なる時間に分離してしまえばよろしい。

彼は彼の友人を伴い自身は登坂を友人には墜落をそれぞれ行為させることによってみごとにこの壁にとりつくことに成功した。

しかし奇妙なことに彼がどれだけ登りつづけても決して頂上に達することはできなかった。

再び彼の理論によればつまりこの壁は登れば登るほどその登る者が縮んでいくようになっているのである。およそ10mで半分の大きさになるので次の5mがそれまでの10mに相当しつまりこの距離で最初の4分の1の大きさになる。そしてそれが永遠に繰り返されることになる。

彼が100m程登ったとき巨大な昆虫が彼の頭上にとまりお前は何処へ行くのかと尋ねた。私はどこにも行きはしない。ずっとここにいたのだしこれからもずっとここにいつづけるだろう。では何故登っているのだ。これは登っているように見えるだけだ。私が登ると同時に友人は落下し二人の行為を合わせれば私はすこしも移動してはいない。するとお前は死んでいるのか。それは私には

分からない。死んでいるものに自分が死んでいるのか生きているのか分かるものだろうか。なあにそれは分かるものだ。この壁の頂上まで行けばすべてが分かるだろう。そう言って昆虫は飛び去っていった。

§ 死の分割装置

[死の分割装置とは]

我が国の慰学会の権威であるスコーレム博士の考案による死の分割装置は世界に類を見ない方法によって死を5つに分解します。(特許出願中)

[使用方法]

1. ゼムハンドル (N) を右にまわし、アブソパドル (K) が安全に開いたことを確認してください。
2. セマンダイヤル (P) に指を入れ、図のように押してください。十分に押し込んだら、引いてください。
3. 引くと指が切断されますので、他の人の指を使用するのがよいでしょう。
4. グラリ棒 (A) を肩にかけて、すこし歩いてください。屋外に出ることが望ましいかもしれません。
5. 図には3つ間違いがあります。気を付けてください。
6. 1から5までを十分と思えるだけ繰り返してください。
7. 6はしなくてもかまいません。

[注意事項]

1. 使用方法をよく読み、すぐに忘れてください。
2. 幼児の手の届かないところに保管して、すぐに忘れてください。
3. 健康に害があります。使わないでください。
4. 一日、二度以上は行わないでください。

[困ったときには]

1. 望みはありません。あきらめてください。

[図]

図は省略いたしました

§ 網膜

一日の仕事が終わり暖炉の前でゆったりと体を伸ばしながら彼は自分の網膜をながめつづける。

そこには様々な模様が描かれており過去とそして未来のめまぐるしく変化しつづける現象をそのすべてを読み取ることができる。

思い付いて網膜をめぐってみると思った通りこの宇宙を律する最後の究極の理論がそこに書かれていた。

彼がそれを紙に書き写すのにはほんの3分しかかからなかった。

§ 郵便配達

郵便配達が心配しているのは自分が文字を読めないということでだから自分の担当する郵便物を正しい宛先に届けているのかどうか彼には分からない。

もしも間違っていたら彼は郵便配達をやめなくてはならないだろう。幸い今まで誰からも苦情がきていないのは偶然か幸運かによって宛先を間違えずに配達してきたからなのではないだろうか。

それとも今まで担当した郵便物はどこにも配達せずにすべて自分の家の保管箱にしまいこんでいるからだから誰もそのことに気づいていないのかもしれない。

もしかするとそれはいけないことなのかもしれないと思わなくもないのだがあるいはその郵便物はすべてある一人にあてて送られてきた郵便でしかもそのある一人というのが郵便配達自分自身であるということもありうるはずでそれならなにも悪いことなどないではないかとも思う。

それにしても文字は読めなくても絵なら分かるのだから地図さえあれば絶対に間違えることなどない。地図があれば自分は完全な郵便配達になるのだとそう彼は信じている。

§ ニュース

今日のお天気は豪雨です。今日の町は川になります。町のことは川と呼ばなくてはなりません。お間違いのないようにお願いします。

なお、この雨には触れないようご注意ください。

この雨粒は生きていて、触れるものにはみさかいなくかみつくおそれがあるようです。

次は時間です。

今朝、初めてこの町に時間が訪れました。

記者会見の席では、今回の事件について、事は極めて重大であると認識していると答えただけで、そそくさと部屋にひきあげてしまいました。

集まった記者達はこの分別のない行動に騒然となり、一時は暴動の発生が危ぶまれましたが、彼らに中古ではありましたが、新品の腕時計が配られたため、大きな騒ぎにならなかった模様です。

月について、新しいニュースが入りました。

月が繁殖期に入ったという発表がありました。

満ち欠けをしなくなったため、なんらかのバランスが崩れたのでしょうか、数日の間どんどん増え続け、現在、空の半分ちかくが月で覆われています。

§ エルブラン博士の主要論文一覧

-言誤学

空虚な思考としての言語あるいは不在の文字
バベル期の言語構造に関する私見

-物離学

渦時間の攪拌と沈殿物に対する消極的な感情について
光線の性格分析 - 主に緑色について
光線の性格分析 - 虹の場合

-考慮額

本当の嘘つきは嘘をつかない-嘘をつくことの困難さについての私見
己らの思想は間違っている

-狂育講座

大腸菌がノーベル賞をとるまで
鉋物は忘れない
完全無欠の試験

-文禍人類学

宇宙の過失としての人類
寄生する意識

-遅理学

結果は原因より先に起きている-ある遅理学者の懺悔

因果はいつめぐってくるか-来る前に電話くらいしろよ

-猫理学

確実な学としての毛並み
瞳孔と宇宙の神秘のエロチックな関係について
我がしっぽ以外に存在するものなし

-呆率学

30%
72%

-吸学・吐学

生命現象としての吸う学
無機質社会における反吸学=吐学
微咳分子の入り口
胃相空間論の出口
怪奇性数論

-軽罪学

自転車は誰のもの
金は天下のろくろっ首

-存在しないものための分類学

精神のないかたに関する予言
存在しないものを観察しない方法論序説
分類木の切り倒し方

-生裏学

脳下垂体暗喩論

§ 地図

町で一軒しかない生屋に地図を買いに訪れる人が絶えない。
というのも店の前の看板にこの町の地図がぶらさげられているからだがそれは
単なる装飾であり生屋なのだから勿論地図は扱っていない。
店頭にある地図は縮尺2倍で確かに一部分をめくってみると例えば店の番犬の
犬小屋が主人の家の居間ほどの広さに描かれている。

数年前にいたずら心を起こした子供たちがこの地図をいっぱい広げようと店

先から盗み出したときは町は地図の下敷きになりその端が海のかなたまで達したという。

地図には町の家の一軒一軒のみならずその部屋や家具や住人たちの姿さらには持ち物のひとつひとつまでもが描かれているらしい。町に存在する物はすべてがこの地図に描かれているといわれている。

幾つかの疑問。例えば住人達は生きていて動き回るわけだが地図の中に描かれた住人達ははたして動いているのだろうか。あるいは二倍の縮尺に描かれているということは実物が二倍に薄められているわけでそのとき薄めるために使われたものはなんであつてもしそうならその地図の半分は存在しないもので埋まっているということなのだろうか。あるいは本当にこの地図にはこの町のすべてが描かれているのだろうか。すべてというならこの地図自体も地図の中に描かれているのだろうか。この地図がこの町に属しておりこの地図がまたこの町よりも広いのであればこの地図に描かれている町の境界はいったいどこになるのだろうか。

彼はそういったすべての疑問には根拠がない。何故なら世界はもうすでに存在しているからだと冷淡に答える。

このようにこの地図に対する人々の興味に対してことさらつまらないことだとしてもいうように返答し地図については無関心であるかのようにみせかけているにもかかわらず彼は足繁く生屋を訪れ店先の地図を盗み見るようにして帰っていく。

§ 講義

瑪瑙には時間を遮断する性質があります。

地上のあらゆる生命は進化の過程でこの瑪瑙の時代を生きてきたから瑪瑙の遺伝子を必ず持っています。

それでどんな生物もある程度は時間を遮断して生きているのです。

わたしたちがいくつもの時間の流れの中で生きているのはそのせいですし思い出や空想という時間の中で死なずに生きていられるのもみんな瑪瑙の遺伝子の力なのです。

修行者の中にはこの瑪瑙の遺伝子を体の中から排出し時間と直接対決しようとするものもいますが修行者達はその望みを達したとたん彼らの姿はこの宇宙から消えてしまうので時間の中にとられるということの意味をわたくし達は

知ることはないでしょう。

§ ごみ

ごみの配給車がやってくると人々はいそいそと身の回りのものを手に車の周りに集まってくる。

大きな子供くらいの大きさの機械は正式な名前は誰も知らないのだが町の人達はジャッポクと呼んでいて縦に長く一方の端に取り入れ口がその反対側には排出口がある。

本体中央を支えるように台がついていてハンドルを回すとジャッポクも回るようになっていく。

集まった人たちは順番に取り入れ口に持ってきたものを入れる。

機械は甲高くいらいらさせるような奇妙な旋律を奏で始めるが二三分もすると排出口からみごとなゴミを吐出す。

ゴミが飛び出すとき人々は歓声をあげその持ち主はひとかけらもこぼさないように慎重に両腕でそのゴミをかきあつめ自分の袋に大切にしまいこむ。

先の者がまだゴミを集めているのにもかまわず次の者はいそいそと取り入れ口を開け自分の作業にとりかかる。

§ 人工心臓

彼には心臓がない。

ある朝ベッドで起きあがると胸からシーツの上に心臓がぼたりと落ちてしまったのだという。まるで大きくて分厚いバラの花びらが落ちるようだったと彼はいう。

それでも今では人工心臓によって元気に生活を続けている。

人工心臓は毎月改良が加えられ新しいものとおきかえられていく。

改良されているのだから新しくなるたびにサイズが前よりも大きくなっていくのは仕方のないことだと技師が説明する。

かくして最初は掌にのる程の大きさであったものが今では町よりも巨大な仕掛けになってしまった。

彼の足から伸びている管は町の地中に埋められた人工心臓につながるチューブなので誰かがつまづいてそれを抜いてしまうと町中が彼の血液で血まみれになってしまう。

そのたびに町のすべての小学校の子供たちが駆り出されあらゆる路地をモップで掃除することになる。道や壁や時として屋根の上までも。

町の人たちはそれを楽しみにしているようなふしもある。

§ ポルノ

この項は削除されました。

§ 時間に関する論文

過去へ時間移動した場合タイムパラドックスが生じないという制約条件に基づき観測者Aが過去 $t_0 - t$ の時点に移動した場合の観測者A1ともともとの時刻 $t_0 - t$ における観測者A0は相互に観察することが不可能でなくてはならない。

ゆえにA1はA2から半径 $r = 2ntc$ (ただし t は遡行した時間 c は光速度 $n = 1, 2, 3 \dots$) の無限個の同心円上に分散されることになる。さらにAの質量を m としたとき $m = \sum_{n=1, \infty} 2\pi r n M_n$ となる。ただし M_n はAが半径 ncr 上に分散された質量の全体。

以上によってタイムパラドックスの起きない安全な時間移動が可能であることが証明された。

§ 町の噂

彼は実は半分魚なのではないか。町の人々は内心みんなそう思っている。

水の中にもぐったまま三時間もあがってこなかった。

確かにえらをみた。

光の具合ではうろこが光るのがみえる。

目がまるい。

息が生臭い。

胸に鱭がある。

ときどき鰓が開いている。

それでも町の人たちが何も言わないのは彼が海からとってくる魚の味は格別でそれを失うことには耐えられないと思うからだ。

ということは本当は彼は半分どろこか全部が魚なのかもしれない。

§ 分考器

分考器を使えば自分の考えを幾つにも分解しひとつひとつでは何の考えなのか分からないほどに細かく細分化してしまい結局もとにもどすことができなくなってそのようにして自分の考えを忘れてしまうことができる。

またある人は自分の中のいろいろな思考を分離し食事に混ぜて他の人々に食べさせ自分の考えを替わりにそれぞれ考えてもらうために使う。

しかしこの方法では他の人たちに分けてしまった考えを取り戻すことができないのでちょっとくやしい思いをしなくてはならないこともある。

生屋の主人はこの方法で自分の細君のことをすべて忘れてしまった。勿論彼がそれを後悔している様子は少しもない。

§ 講義

今日は休講です。

§ 公園

公園に時々現れる旅のジャグラーはどんなものでも頭の上に放り投げ受け止めまわすことができる。

バトンくだもの旅行かばん子供噴水公園町そして自分自身。

驚いてみせるとジャグラーはとんでもないという顔をしてこう話し始める。

わたしなんかたいしたことはありません。わたしの師匠は自分で投げ上げた自

分がさらに自分を投げ上げその投げ上げられた自分でさらにさらに自分を投げ上げしかもその投げ上げられた自分によってもう一度自分を投げ上げそのうえさらにその投げ上げられた自分で自分自身を投げ上げしかもそれなのに

ジャグラーはどうやら話好きの男のようだった。

§ 墜落

ときどき壁の上のほうから何かが落ちてくるのだけれど地面にぶつくと跡形もなく砕け散ってしまいそれが何なのかは分からない。

不運にもその下を歩いていた者がいると通行者と落下物は完全に混じり合い分離することは不可能になる。

その家族や知人というのはつまり歩いていた者の家族や知人のことだが死体と呼ぶべきなのかどうかもあやしい流動体が本人であると断言できないのでその物体は回収業者にひきわたされる。

町にはこの物体からリサイクルされた者が何人も生活しているらしい。

なにかが落ちてくるとそのあとあたり一面にとても妙な気持ちになるにおいが漂いそんな日の夜はたくさんの子供たちが生まれる。

老人たちはそれはただの迷信だといって信じていないふりをしている。

§ DNAのピアス

町には私鉄の終着駅があるがそこで降りる人は年に何人もいない。

だからその家出少女が町にやってきたときは彼女の素性について町の誰もがひそひそとうわさしあった。

ひときわ注目を集めたのは彼女のピアスでそれは誰がみてもどう見てもなにかのDNAにしか見えない。

直接それが何のDNAですかなどと聞く不躰な者はいなかったので少女はこの町の男たちはみんな自分に気があるのだと思い込んでしまう。

§ 屈屋

主人はなんでも曲げてみせるという。

ひとつ聞きたいのだがと彼は訪ねる。

なんでも曲げてみせるといったって君に曲げられないものがないわけではないだろう。

もしも本当のつまりプロのという意味だが本当の屈屋なら自分の限界というものも知っているはずだからそのところをよく教えてもらえないだろうか。

それを聞くと主人は真っ赤になっていきりたちなんでも曲げられると主張してやまない。

§ ゆめ

「ゆめってなに？」

「眠っている間の現実のことさ」

「すると眠っていることをゆめっていうのね」

「それはちょっと違うな。眠っている間に体験しているその色々な経験のことをいうんだよ」

「それは眠っているということでしょうか？」

「ううむ。君は、眠っている間に、空を飛んだり、誰かにあったりしたことはないのかな」

「眠っている間は、眠っているだけだわ」

「それじゃ、誰かが、目をさましたとき、今、誰誰に会っていた、なんて言うのを聞いたことはないかな」

「そんなばかなことはないわ。誰だって、眠っているときは眠ることしかできないじゃない。もしかして、あなたはそういうことができるの？」

「勿論、僕は夢をみる。誰だって夢を見るところにいたけれど、君はゆめを見ないみたいだね」

「ゆめというのが、あなたの言うようなおかしなものだとしたら、わたしはゆめを見たことはないし、おそらく、この町の誰も、そんなものを見たことはないと思うわ」

§ ニュース

ニュースの時間です。

今朝、生屋の店先の地図が盗まれました。

店の主人は、これで町には地図が存在しなくなりました。

世界の秩序はこれで崩壊してしまうだろう。

と、インタビューに力なく答えていました。

店の前に散らばっていたハガキや手紙から、おそらく、行方不明になっている郵便配達、事件に深い関わりを持っているのだろうと、考えられています。

一日も早い事件の解決が望まれます。

次は明るいニュースです。

公園に宇宙人が現れました。

この宇宙人は、月から来たと言っていますが、月には誰もいないのだとも話しています。

ミニスカートで胸もふくよかであるため、町の男性たちはファンクラブを結成し、この宇宙人を月に返すため、ロケットを製作することになりました。

しかし、この宇宙人が本当に宇宙人だとしたら、果たして本当に女なんでしょうか。

最後のニュースです。

もう、宇宙には新しいニュースはひとつも残っていません。

これが最後のニュースです。

もう、これからは、ニュースはありません。

§ 講義

今日は休講です。

§ 柔器店

柔器店に出入りする客は例えば首だけで身長ほどの長さがあったり目が高速で回転するためあたりじゅう涙でびしょぬれになったり口の中からぼろぼろと歯をこぼしつづけていたり（そのくせ口の中には歯がびっしりあって少しも減ったようには見えない）大きな羽根が背中にさかさまにはえていたり知らず知らずの間に足がリズムを刻むため通り過ぎた後にちいさく細切れになったリズムがこぼれ落ちていたり臆病であるためにいやまぎらわしさを避けるため言い方を替えると臆病でありつづけるためにずっと黒豹になったままでいるとかたまには死体もくる。

店の顧客名簿を見ると名前は一人しか書いてなくてそれは彼の名前だった。

§ 床下のかぶとむし

床下に住むかぶとむしは最近自分の住居の上になにやら白いものがかぶせられていることに困惑している。

その白いものは布製で絹とよばれる素材らしい。なめてみるとすこし喉がひりひりしたのですぐに分かった。

たぶん上の住人がここに置き忘れたものなのだろうがわざわざ持って行ってやるほどのこともないだろうと思う。

そういえばこの布で手をくるんで歩いている上の住人を見たことがあるような気がする。

あのときは空高くを飛んでいたのも細かいことまでは分からなかったがたぶんこの白い布を手にもきつけていたのだ。

だからといってこの白いものがどこかにいつてくれるわけではない。

住処をよそに移そうかなとかぶとむしは考えはじめていた。

§ 招待状

彼の友人たち全員が招待状を受け取った。

```
+-----+
|あたらしい人たちの歓迎パーティを開きます。  |
|                                                    |
|昨日の午後4時にお集まりください。            |
|                                                    |
|                                                    | H. |
+-----+
```

時間丁度に友人たちは全員集まったが彼は最後まで姿を現さなかった。

友人達が彼の家を辞するとき見たことのない灰色の猫が二匹の子猫を従えて屋敷の門を出ていくところに出会ったという。

そして彼の姿をみたものは誰もいない。